

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後ほぼ横ばいで、平成17年は19万4千トンでした。

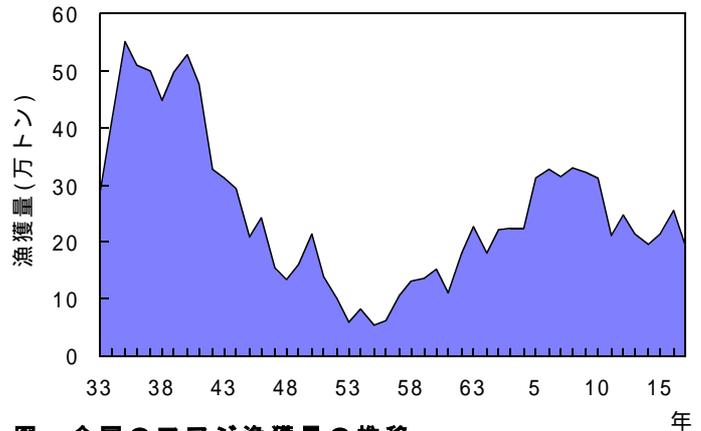


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成18年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、長島沖～串木野沖、野間池に漁場が形成されました。

薩南海域では、開間沖、内之浦沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小アジ(1歳魚・平成17年生まれ)及びアジ仔(0歳魚・平成18年生まれ)主体に601トンの水揚げで、前年の98%及び平年の60%でした。

3. 平成18年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、アジ仔・豆アジ(0歳魚・平成18年生まれ)及びマアジ小・中(1歳魚)でしょう。

来遊量は、低調であった前年を上回り、平年を下回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、現在までの定置網やまき網での漁況経過から、低調であった前年並みで、平年を下回る水準であると考えられますが、11月以降極端に低調に推移した前年は上回ると考えられます。

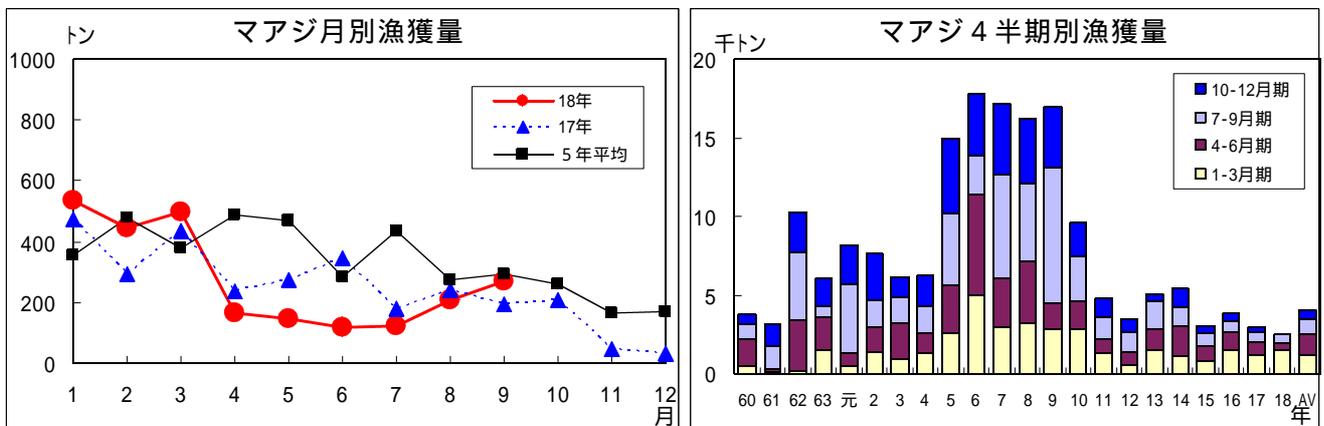


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成13～17年)の平均値、平成18年9月27日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンをピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、増加し平成17年は60万4千トンでした。

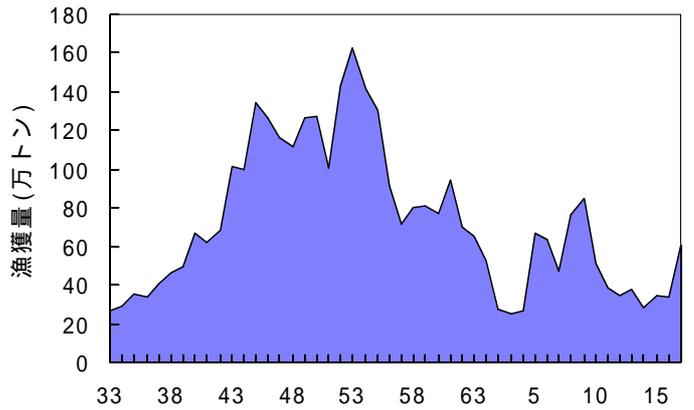


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 平成18年7～9月期の漁況の経過

【 4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

薩南海域では、湯瀬，開聞沖，種子島東，島間沖，屋久島南が主漁場となった。

北薩海域では，阿久根沖～串木野沖，野間池，縄瀬に漁場が形成されました。

4 港計では，7～9月はゴマサバ中小(2歳魚・1歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)及びゴマサバ豆・小(0歳魚・平成18年生まれ)主体に4,418トンの水揚げで，前年の44%及び平年の126%でした。

3. 平成18年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は，ゴマサバ中小・中(2歳魚・1歳魚)及びゴマサバ豆・小(0歳魚・平成18年生まれ)となるでしょう。

来遊量は，好調であった前年を下回り，平年を上回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体は，近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ2歳魚は，前年・平年を上回ると考えられます。

ゴマサバ1歳魚は，好調であった前年を下回り，平年を上回ると考えられます。

ゴマサバ0歳魚は，好調であった前年を下回り，平年を上回ると考えられます。

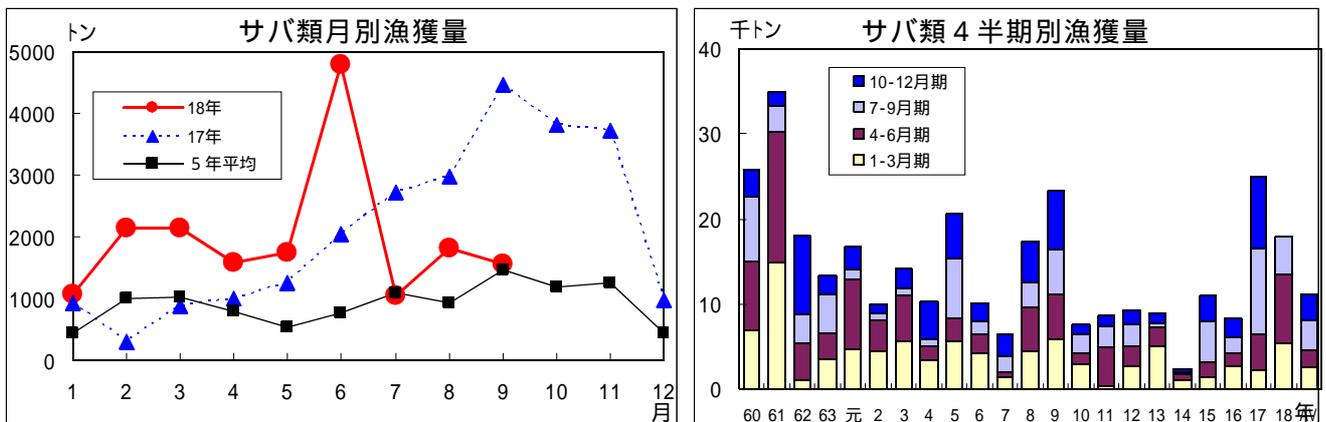


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成13～17年)の平均値，平成18年9月27日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成17年は2万8千トンでした。

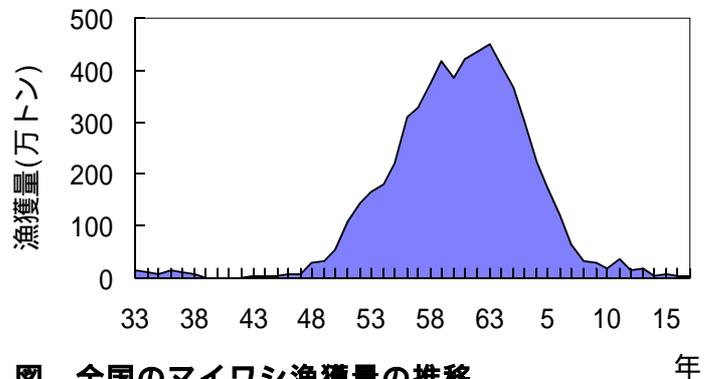


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 平成18年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で0.4トン（前年比635%，平年比2%）で前年を上回ったものの、平年を大きく下回り、まとまった水揚げはありませんでした。

なお、内之浦では小羽主体に定置網で27.1トン、棒受網で15.5トンと、5年ぶりにまとまった水揚げがありました。また、宮崎県海域においても夏期に小羽主体にまとまった水揚げがありました。

3. 平成18年10～12月期の見とおし

低水準ながらも散発的な水揚げがあり、低調だった前年を上回るでしょう。

（根拠）

マイワシ資源が全国的に低水準にあり、資源回復の兆候がないことから今期も低調に推移すると考えられます。一方、九州東岸では小羽主体にまとまった来遊が見られており、本県海域においても散発的な水揚げが続くものと思われます。

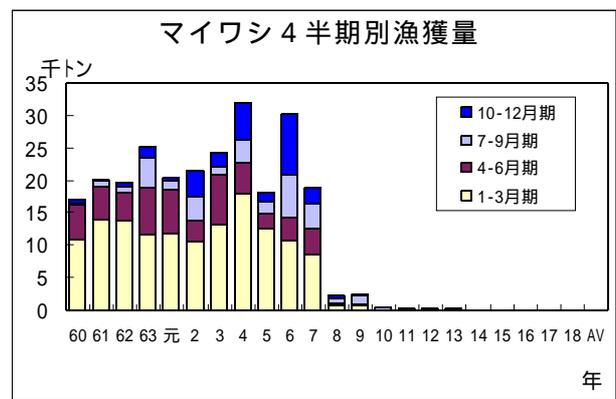
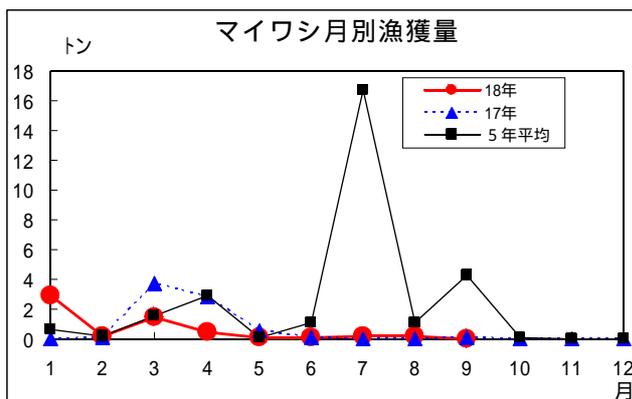


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年9月27日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成9年は5万5千トン、平成17年は3万5千トンでした。

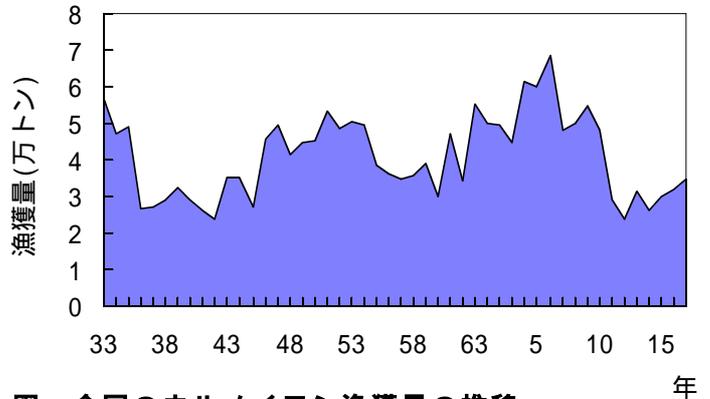


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成18年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で180.1トン（前年比150％，平年比28％）と、前年を大きく上回ったものの、平年を大きく下回りました。北薩海域の棒受網では535.6トン（前年比159％，平年比97％）と、低調だった前年を大きく上回り、平年並みとなりました。

8月に主要な漁場の一つである北薩海域の棒受網で今年生まれの小・中羽銘柄が比較的多く漁獲されましたが、当歳魚の中羽銘柄を漁獲の主体とするまき網では前年同様低調な水揚げが続いています。

3. 平成18年10～12月期の見とおし

北薩海域・南薩海域とも中羽銘柄（0歳魚・平成18年生まれ）が漁獲の主体で、来遊量は低調だった前年を上回り、平年並みとなるでしょう。

（根拠）

今期の漁獲の主体となる0歳魚（平成18年生まれ）の、棒受網による水揚げが好調に推移しており、来遊水準は比較的高いと考えられます。

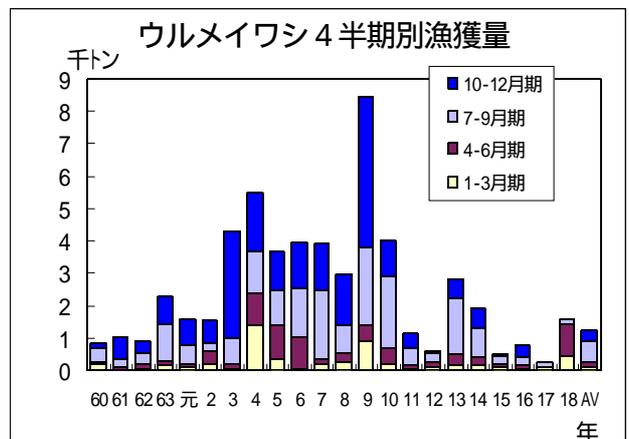
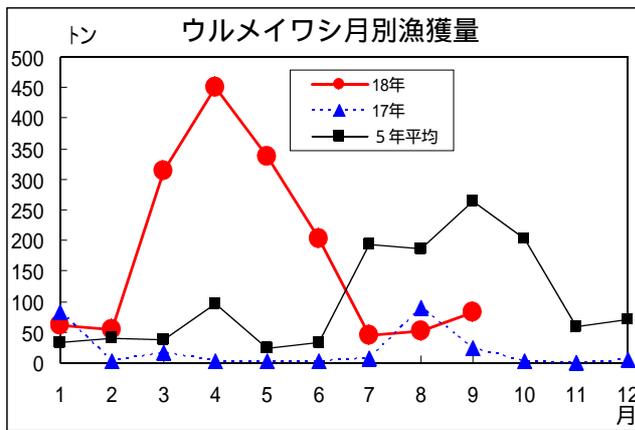


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年9月27日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は再び大きく減少し、34万7千トンとなりました。

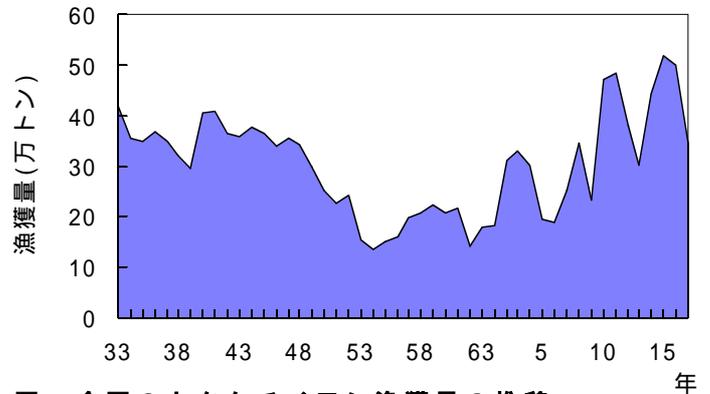


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成18年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で233.7トン（前年比1252%、平年比157%）の水揚げで、前年・平年とも大きく上回りました。北薩海域の棒受網では157.1トン（前年比159%、平年比127%）の水揚げで、前年・平年とも上回りました。

北薩海域の棒受網では小・中羽銘柄（0歳魚 平成18年生まれ）を主体に水揚げが好調に推移しています。

3. 平成18年10～12月期の見とおし

小・中羽銘柄（0歳魚・平成18年生まれ）が漁獲の主体で、来遊量は、好調であった前年並か前年を上回り、平年を上回るでしょう。

（根 拠）

北薩海域の漁模様が、まき網・棒受網とも小・中羽主体に好調に推移していることから、来遊水準は高いと考えられます。

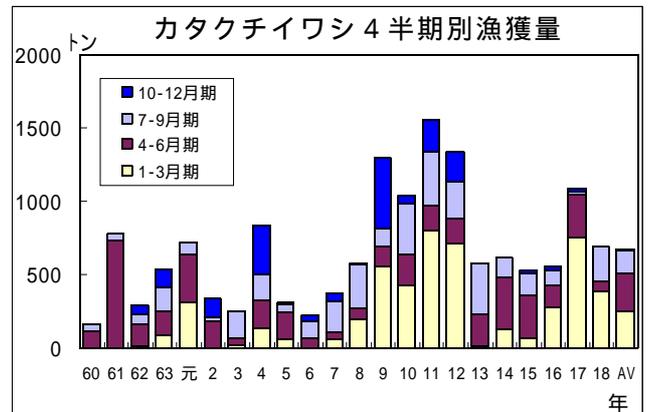
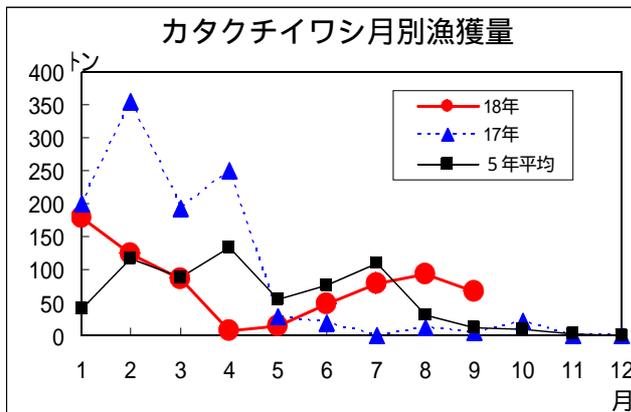


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年9月27日までの水揚量を使用。

[その他の魚種]

ムロアジ類 (4 港計)

1. 経年変化及び平成18年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年以降はやや増加し、平成14年には4,418トンとなりましたが、その後は減少し平成17年は1,675トンとなりました。

平成18年7～9月は、薩南海域でクサヤモロ(銀ムロ・青ムロ)主体の漁獲があり、期全体では567トンの水揚げで、前年の2,564%及び平年の154%でした。

2. 平成18年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、クサヤモロ(銀ムロ・青ムロ)で、薩南海域に漁場が形成されるでしょう。

来遊量は、低調であった前年を上回り、平年を下回るでしょう。

オアカムロ (4 港計)

1. 経年変化及び平成18年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成17年は1,165トンとなりました。

平成18年7～9月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では292トンの水揚げで前年の489%及び平年の88%でした。

2. 平成18年10～12月期の見とおし

来遊量は、前年・平年を下回るでしょう。

マルアジ (アオアジ) (4 港計)

1. 経年変化及び平成17年7～9月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成15年は3,150トンとなりました。平成16年以降は大きく減少し、平成17年は307トンでした。

主に北西薩海域で漁獲があり、期全体では87トンの水揚げで、前年の158%及び平年の50%でした。

2. 平成18年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ中・大(1歳以上)で、マルアジ豆(0歳魚・平成18年生まれ)も漁獲されるでしょう。

来遊量は、低調であった前年を上回り、平年を大きく下回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ中・大(1歳以上)の来遊量は、低調である前年を上回り、平年を下回る水準です。

マルアジ豆(0歳魚)は、9月までの漁況経過から、来遊量は低調であった前年並みで平年を大きく下回ると考えられます。

総合的にみて低調であった前年を上回り、平年を大きく下回ると考えられる。

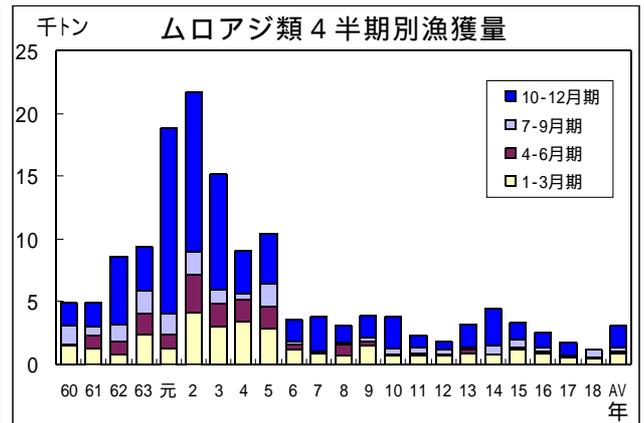
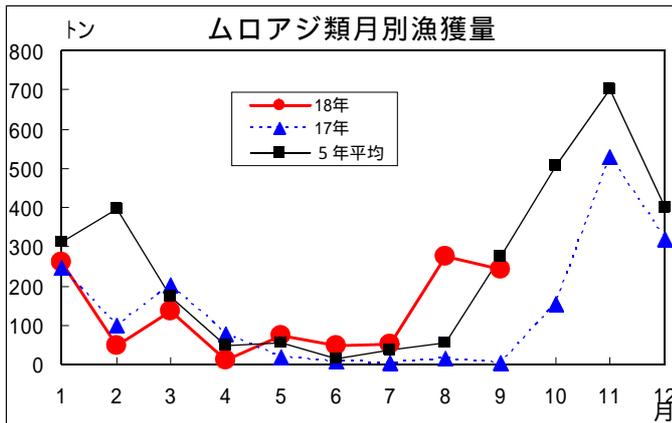


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

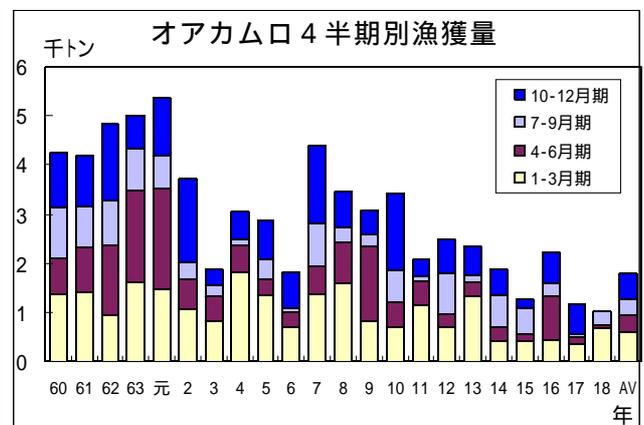
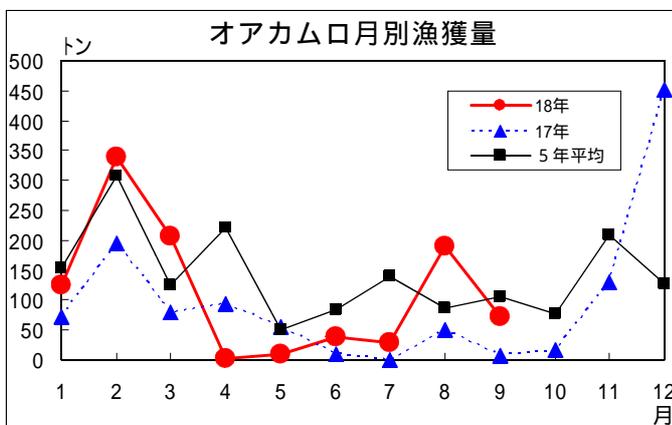


図 オアカム口まき網漁獲量変化(4港計)

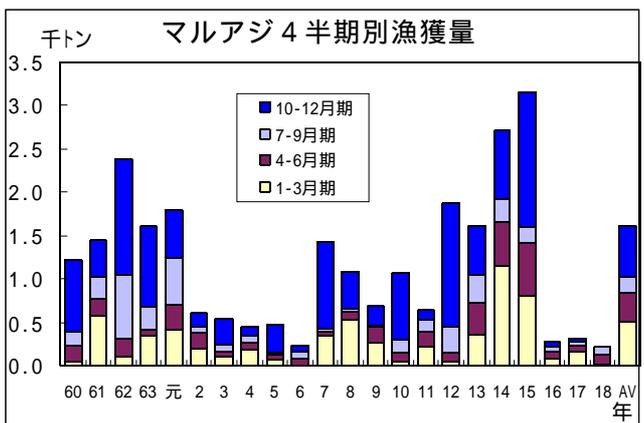
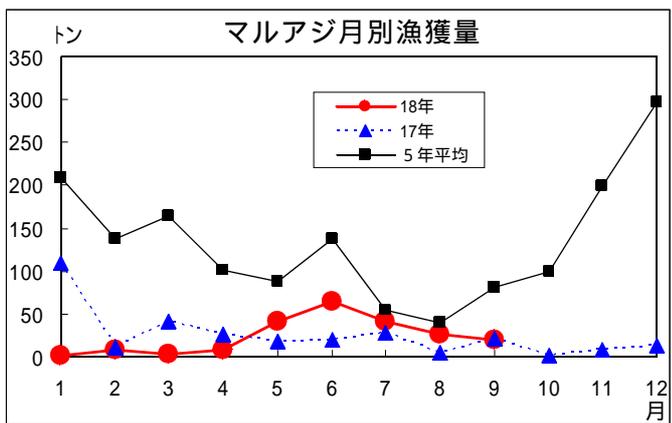


図 マルアジ(アオアジ)まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成13~17年)の平均値,平成18年9月27日までの水揚量を使用。

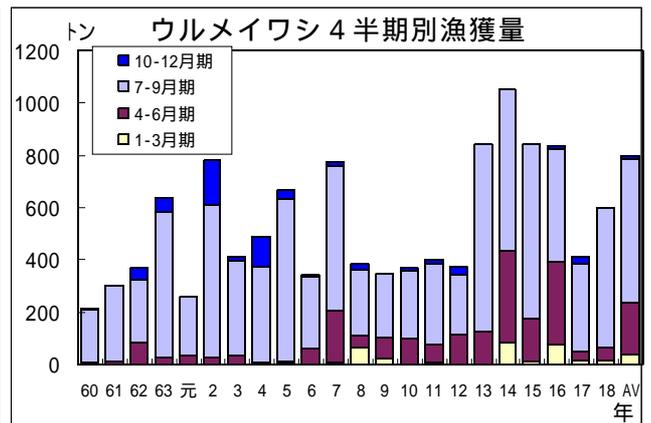
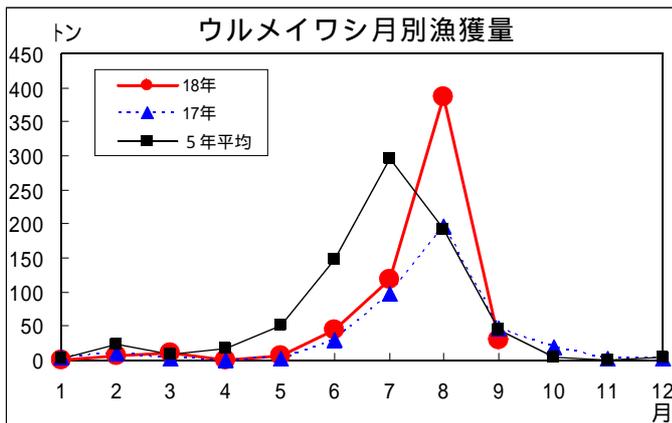


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

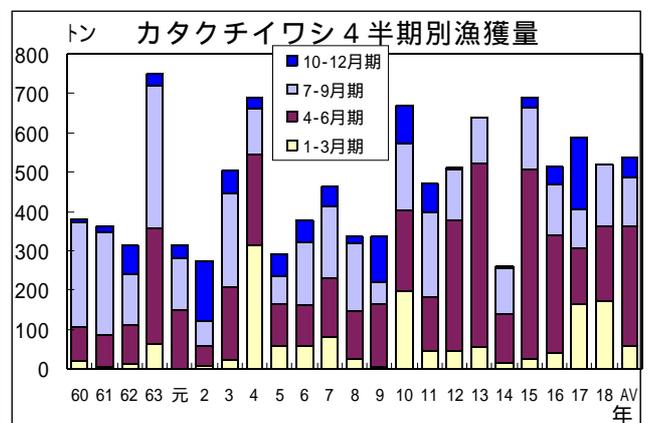
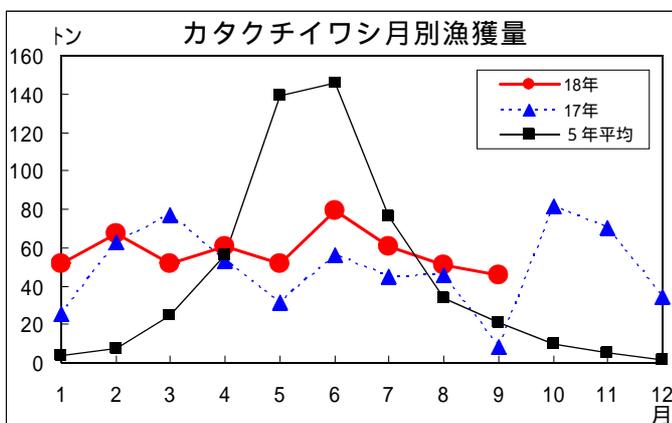


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

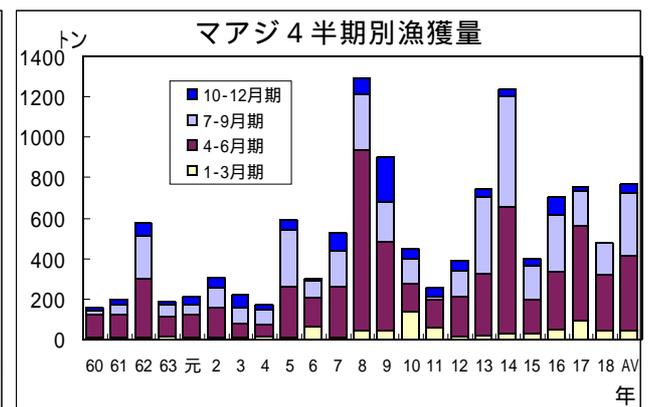
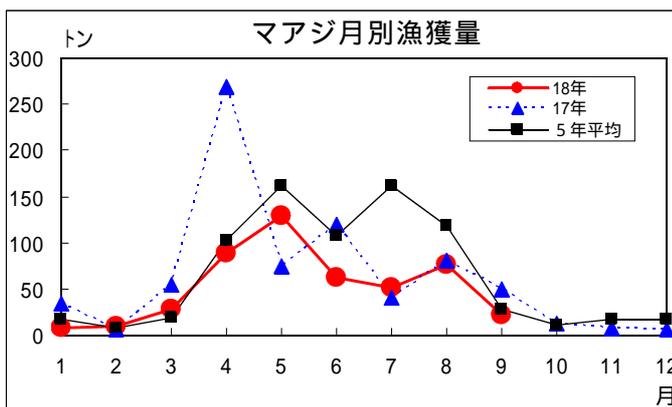


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

平年値は過去5年（平成13～17年）の平均値，平成18年9月27日までの水揚量を使用。